

早期栽培水稲の苗代分蘖について

丸野俊徳*・塩浦時夫*

MARUNO, T., and SHIYOURA, T. Tillering of Seedlings on the Nursery
in Early period Cultivation of Rice.

緒言 最近苗の素質の問題として若苗分蘖苗について色々論議されているが、之は地域気象、環境、土壌条件、品種、栽培法等により異なるので一律に論ずる事は出来ない。筆者は種子ヶ島における水稲早期栽培の苗代分蘖について研究したので、成績の概要を報告する。

試験方法 供試品種農林 29 号，1 区 2 坪 2 区制とし 2 分位に催芽した種籾を 3 月 17 日に播種した。苗代では播種量を 0.5 合～6 合として苗代日数 35 日，40 日，45 日苗について苗代分蘖の発生及び生育の状態を調査し，本田においては 35 日苗の分蘖苗（2 合播の 1 号 2 号分蘖が共に発生している苗）と無分蘖苗（4 合播のもの）を挿秧の深さ 3～7.5 cm，1 株本数を夫々 1 本，4 本，7 本植として 4 月 23 日に植付け苗代分蘖の生存有効歩合及び之が生産力について比較検討した。なお苗代分蘖の生存と挿秧の深さとの関係を更に明らかにする為に主程の植付深さとは別に分蘖の葉先が地表面より上下にある場合について調査を行った。

試験成績並びに考察 苗代分蘖は播種量の少い程多く発生し調査区における分蘖苗と全苗数との割合は 1 合播で 75%，2 合播で 32%，4 合播で 4% である。次に分蘖苗に発生している分蘖の本数を調べてみると

分蘖が 3 本発生している苗は 0.5 合，1 合播の如き薄播に発生し，2 合播では認められず，4 合播以上の分蘖苗はすべて 1 本分蘖苗である。尙分蘖の節位別発生についてみると 1 本分蘖苗の場合 1 合播では 1 号，2 号，3 号の順位で 2，号 3 号分蘖が発生しているが，2 合播以上は殆んど 1 号分蘖であり，薄播程高位の分蘖が発生し得る事を示している。分蘖の 2 本発生している 2 本分蘖苗では 3 号の発生はなく 1 号，2 号が同じような割合で発生している。次に成熟期における苗代分蘖の生存有効歩合は活着期最高分蘖期と同様浅植程 1 株植付本数の少い程高い。尙分蘖の葉先が地表面より上に出ている場合は下にある場合より生存率が高く，従つて苗代分蘖の生存は呼吸作用と関係の深い事が覗える。穂の分解調査を行つて次節位別穂重及びこれが 10 株穂重に対して占めている比率を調べてみると大株程主程の比率は高い。尙分蘖苗では浅植 1 株本数の少い程 1 号，2 号の穂は重く亦比率も高く深植大株になるにつれて低く，逆に 5 号，6 号，7 号の比率が高い。また無分蘖苗に発生している 4 号分蘖も分蘖苗の 1 号，2 号と同様な関係があり，5 号，6 号，7 号は何れの場合でも無分蘖苗の比率が分蘖苗より高い。尙反当玄米重は分蘖苗無分蘖苗何れも 1 本植は減収し分蘖苗における 4 本植と 7 本植では 4 本植が幾分優りその差は浅植程大きい。之は 4 本植の 1 号，2 号分蘖が取量

* 鹿兒島縣農業試験場熊毛分場

に対して占めている比率が大きい為と思われる。尙分蘖苗と無分蘖苗では浅植及び1株植付本数の少い程分蘖苗が優り深植大株になるにつれてその差は少い。

以上の成績を総括してみると苗代分蘖の発生歩合は種々の条件に依つて異なるものと考えられるが、播種量との関係は2合播で32%位で極端な薄播をしない限り多量の分蘖苗は得られない。尙苗代分蘖は1株本数が少くて浅植程生存有効率が高く且つ分蘖の葉先が地表面より上に出ている場合生存率が高いので苗代分蘖を生かすような植え方としてはつとめて小株浅植に注意する事は勿論分蘖の葉先が地表面より上に出るよ

うな植え方をする事が極めて大切である。分蘖苗と無分蘖苗の収量は一般に苗代分蘖の生きている場合は分蘖苗が優っているが条件の悪い場合は無分蘖苗との差は少い。尙慣行調査により挿秧の深さ及び1株本数について調べた結果は一般に深植大株不齊ひで苗代分蘖を生かすのには不良な条件で植えられているので苗代分蘖の大部分は枯死しているものと思われる。以上の事から苗代分蘖は之を上手に生かせば相当価値があるが、挿秧の方法が悪くて枯死させると無分蘖苗と変わらない結果になり寧ろ4合播位で多くの労力経費を節約する事が出来るものと云える。